

ポストコロナ・サバイバル あなたはどう生き、どう働く？



日時：令和4年6月18日(土) 14:00～16:00
(オンデマンド配信期間) 6月20日(月)～7月3日(日)

講師 ^{さわ まちこ} 大沢 真知子 さん (日本女子大学名誉教授)

《講師プロフィール》

南イリノイ大学経済学部博士課程修了。シカゴ大学ヒューレットフェロー。ミシガン大学ディアボーン校助教授、亜細亜大学助教授・教授、日本女子大学教授を経て現職。

専門は労働経済学。近著書は『21世紀の女性と仕事』(左右社、2018)『なぜ女性の管理職は少ないのか』(青弓社、2019)。東京都女性活躍推進会議専門委員。



以下、講演の一部要旨をご紹介します。

アメリカで起きた「静かな革命」

1960年代のアメリカでは、女性の社会進出が進むのに併せて起こった市民権運動により、女性のアイデンティティは大きく変化した。女性の高学歴化が進み、家族の形も多様化した。社会の意識そのものが変わったことから「静かな革命」と呼ばれている。

日本では働く女性が増えてきているにもかかわらず、労働環境や社会保障制度は変化していない。私たちの意識自体があまり変わってこなかったため、結果として、家庭で女性に犠牲を強いている。制度を変えることが必要だが、日本ではそれが困難なために「女性を男性と平等に」と言われても「このままで構わない」となってしまう。重要なのは、時代の変化の先を知り、その方向を見ながら、私たちが意識を変え行動していくこと。

平等と思える関係性を築く

大きな時代の流れを見ると、日本も共働きが標準になっており、これからポストコロナを生きる夫婦は共に働き、共に子育てをする時代になる。北欧やアメリカでは、今や父親の育児は当たり前になっている。妻が会社でバリバリ働き、自営業の夫が子どもを世話するなど、それぞれの夫婦がそれぞれの働き方や子育ての方法を選択している。

性別役割分業を超えて、何をどう分担するのがベストで平等であるのかをそれぞれの夫婦が話し合っ決めていくことが重要であり、自分たちにとってフェアだと思える関係を築くには、夫婦間のコミュニケーションが鍵になる。

ポストコロナのライフキャリア

コロナが蔓延し始めた初期の頃、非常事態宣言が出され、行動が制限され、在宅勤務が推奨された。その頃からワークライフバランスの意識が変化しはじめ、特に多くの若い世代が生活を重視するといったことが起きている。私たちはコロナ禍を経ることで「人生にとって大切なものは何か」について改めて考える時間をもらえたと思う。

私たちは仕事をするために生きているわけではなく、「ライフキャリア(仕事に限らず、家庭や趣味、地域との関わりなど、生涯にわたる役割や日々の経験の積み重ね)」を充実させ、多重な役割を担いながら生きている。

21世紀のキャリアのあり方とは、どういった生き方をしていきたいのかを自分で考え、それに従った生き方・働き方を選択していくということではないだろうか。私たちが経験するつまづきや仕事や家族との関係において何となくしっくりこないことを人生の転機と考え、より自分にとってふさわしい人生を選択するきっかけにすることができる。

ポストコロナのライフキャリアとは何か。異なる価値観をもつ他者と出会い、両者にとって生きやすい環境を整えていくことではないだろうか。

異なるものを排除せず、異なるものに価値を認め、それを取り入れることで新しい発想が生まれ、時代の閉塞感をうち破ることができる。そうすることで豊かな関係が作られ、既存の制度も変わらざるをえなくなる。

私たちはこれからの時代をどう生き、どう働くか

日本で女性がなかなか活躍できないのは「女性は(結婚や出産で)どうせ辞めるだろう」という前提でチャレンジの機会すら与えられなかったことが大きい。その結果、多くの女性が仕事をやめ、人材浪費が起き、経済がうまく回っていない。実際には、女性の活躍は企業業績と直結する時代が来ている。女性の活躍を推進しないと社会が機能しない。女性も既存の生き方や社会の価値観に自分を合わせるのではなく、自分の人生を自分でデザインしていく時代が来ている。つまり自分の人生を主体的に選び、環境の変化に合わせて柔軟に豊かに生きることが重要となる。価値が多様化していく環境の中で自分らしく生きることを最終的な目標として、異なる生き方を尊重しながら共生する社会こそ 21世紀の日本の社会なのではないか。そのためには生き方に中立な社会制度が必要だ。

日本におけるジェンダー平等はまだ成功したとは言えないが、何も変わっていないと結論づけるのは早すぎる。例えば、不平等だと感じることに口を塞がない人が増えている。私たちが互いに尊重しあい、助け合うことで得られるものは大きい。そしてコロナが教えてくれた「人生にとって重要なことは何か」「豊かに生きるとは何か」。これが今、私たちに問われていることだと思っている。